

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科 修士1年

氏名: 田中 倫明

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>今回の研修によってグローバルな視点や能力とはなにか深く考えるようになった。また、考えるだけではなく、それらを少しは得ることができるようになった。</p> <p>この研修以前は、グローバルな視点や能力について、ただ漠然と日本や海外について知っていることや英語が話せること程度にしか考えていなかった。しかし、この研修を通してより具体的にグローバルな視点や能力について考え、以下のように考えが変わりそれに併せてグローバルな視点や能力を得ることが出来るようになった。</p> <p>1. グローバルな視点について</p> <p>日本人の私という意識を持つようになり、それと同時に他国の他人から見た「日本人の私」を考えるようになった。</p> <p>この研修以前では、海外の方と話す機会が学校の先生や鹿児島大学に在籍している留学生とたまに話す程度だった。しかし、この研修では他国の人と話す機会が何度もあり、その話し相手から自分がひとりの日本人として見られて、意見を求められることを何度も経験した。これまで「日本人の私」という意識を持つことがなかったが、他国の人との会話を通してその意識を持つようになった。また、その会話は「日本人の私」と「異なる文化や風習を持つ他国で育った会話相手」から成り立つため、他国の相手からどのように日本が見えているのかということを考えて話すようになった。この日本とは違う国の人の立場からの視点を考えるという経験は実際にオンライン講義後のイングリッシュキャンプで行ったホームページ作りにもとても役に立ち、実際にホームページの記事を書く際に、そのページを読む相手(想定ではオーストラリア人)は何に共感するのかや何に驚くのかなどを考えて書くことができた。</p> <p>2. グローバルな能力</p> <p>グローバルで活躍するのに必要な能力が英語以外にもあることを理解することができた。日本語以外でコミュニケーションを取る際に英語がとても便利なツールであることはこれまでも分かっていたが、それに加えて、「挑戦力」や「他国の文化を尊重すること」がグローバルな活動では大事だと感じた。英語が母国語ではない人同士でのコミュニケーションになるため、英語だと上手に相手に伝わらないことがこの研修中よくあった。そのときに、間違えても恥ずかしながら何度も相手に伝わるまで伝えようとすることや、言葉では伝わらない場合、写真などを示すなど工夫をしてコミュニケーションをしていた。また、言語的な側面ではなく、文化的な側面からも伝わらない場合があることを知った。たまたま授業で同じグループになった中国人の方が指をつかって数える「指数字」の教え方が1~5までは日本と同じ教え方だがそれ以降の教え方が異なるを教えてくれた。このようなちょっとした文化の違いの他にもいろいろ知ることが出来た。コミュニケーションを取る際に「相手の文化が日本と違う」ということを念頭に置き、相手の文化を尊重しながらコミュニケーションを取ることが大事だと感じ、そのようにコミュニケーションを取るようになった。</p> <p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>この研修を通して学んだ、異なる立場から日本を見ることや間違えることを恐れずに動くことを生かして、私がこれまでにしたことのない地域のボランティア活動に参加してみたり、体験を発信したり、もうすでにあるグローバル活動をしている団体に参加してみたりして地域のグローバル化や活性化に貢献したいと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 野村 俊樹

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>本研修を通して学んだことはシンプルでしたが、自分の概念を変えてくれる強烈なものでした。まず、研修を通して英語の学習や英語を話す上で感じたことを報告します。</p> <p>英語を読み書きすることはあっても、英語を話す機会そのものが私の身の回りではほとんど無かったため、研修中は自分の考えを端的に伝えることはできても、細かいことまで伝えることは難しく、それは圧倒的な語彙力によるものであると痛感しました。普段自分が学んでいる英語は、ビジネス用の英語や自らの研究に関わる専門用語がほとんどでしたので、日常的な言葉(例えば物の名前や食べ物、生き物の名前)の語彙量は少なかったのです。講義中はそういった言葉を必要とする場面が多く、スムーズな会話にはなかなか繋がっていませんでした。</p> <p>一方で、英語を話す際の自分自身のハードルが格段に下がったように思います。正直、研修期間の5週というのは会話能力の習得期間としては短いですが、ですから会話の”質”も成長したのですが、ほとんどは”自身が持っていた英語の知識をどのように駆使すれば会話ができるか”を学んだのだと思います。そしてそれは海外研修で実際に外国の人と英語を話すことでしか得られなかったと思います。英語だけの環境に入ることによって実践し相手に伝わり話ができるというプロセスで自信が生まれました。</p> <p>また、日本で英語を話す機会があっても、話す相手は日本人か日本語なまりの英語に慣れている外国人で、聞くときは日本語なまりの英語かネイティブスピーカーのもので、しかし実際に講義で話をする相手は自分と同じ母国語が英語でない人ばかりで、初めは彼らに自分の英語が通じず、自分は上手く聞き取ることもできませんでした。とても不思議な、そして今まで一度も感じたことのない体験でした。このことは将来グローバルに活躍する上で基本となる重要なことで、今回の研修で学んだ中で最も意義深い体験だったように思います。自分の発音を見直すきっかけにもなりました。今までの学習が真に英語を話すということには繋がっていませんでした、そして話すためには何が必要なのか明確に認識することができたように思います。</p> <p>次に海外の人と交流する中で感じたことを報告します。</p> <p>研修で交流する中で海外の人が日本をどのように見ているのか知ることができました。とは言っても、インターネット等のメディアでそういったことは取り上げられていますし、日本の文化は海外から評価されていることはある程度わかっているつもりでした。しかしJapSoc(Japanese Studies Society)の生徒との交流でそれを肌で感じるすることができました。自国から出て早く日本に住みたかったらと思っている、日本への愛が自分よりも強い、そんな人がいることを知り日本の素晴らしさを身にしみて知ることになりました。また日本人はよくシャイだと言われますが、これは本当にそうだと思います。実際私は最初の週、他の国のクラスメートの積極性にとっても驚き、少し怯んでいました。決して自分の学ぶ意欲が彼らと比べて弱いということではなかったと思います。講義を受ける上での基本的なスタンスの違いでした。研修を通してでしか得られないグローバルな視点、体験でしたしこのスタンスは研修終了後も自分の中に生きています。</p> <p>自分と同じように語学学校へ通っている人の中で、自分と同じ年代の人ばかりではないことも印象的でした。10歳上の人と同じ立場で協力して何か行うという経験そのものは日本でもありましたが、ともに学習するのは初体験でした。こういった経験もまさにグローバルな視点を持っていなければ考えませんし、このように英語以外の気づきも多々散在していたように思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>今回の研修で現在の自分には何が不足しているのか、これから英語を学ぶ上で何をしていけばいいか具体的なことは見えてきました。今回身につけられたことがそのまま地域の活性化のために利用できるかということと大部分はそうではないでしょう。多くははきかけにすぎず、これからどう行動していくかが重要です。まず、引き続きTOEIC等の資格取得のための勉強を続けて行きます。研修後は研修前よりもスコアが伸びており、研修の成果として実感できました。地域活性化につなげていくためにはより高いスコアを獲得することが1つ目安として必要だと考えます。また、上述した学習の仕方(特に会話をするための)を実践していきたいと考えています。講義内で利用した学習法は話すことに特化していました。これを継続することを特に念頭に置いておきたいです。実用的なレベルの英語を習得し、日本に興味を持っている海外の人々に日本の、九州の、鹿児島の魅力を伝えられるように学生生活のみならず、社会に出ても活躍したいです。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 只野 信幸

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>【研修を通じて学んだこと】 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>オンライン海外研修を通じて、英語を話す力をつける事ができました。日本で10年近く英語を学習してきましたが、その多くは読解、筆記、リスニングでした。スピーキングを学ぶ機会はなく、長年英語を学んでいるにも関わらず、英語で外人と話すことは出来ませんでした。今回の研修はオンラインではありましたが、授業は全て英語で行われ、教師も外人の先生でした。日本の講義と違い、2~3人のグループワークで英語でコミュニケーションを取る機会が多くありました。初めはどう伝えたら良いのか分からず混乱する場面もありましたが、先生が簡単な言い換えや推測を通してサポートして下さったおかげで、物怖じせず英語が話せるようになりました。特に成長を感じたのは、同じ研修に参加していた上海の学生とコミュニケーションが取れるようになった事です。初めは互いの発音に癖があることもあり、意思疎通ができませんでした。しかし最終日には会話を共に楽しむ事ができました。そこで初めて、上海と日本の文化の違いや習慣の違いに気づかされました。語学を身につける事で、自分の視野が広がる事を痛感しました。また、授業のトピックは一週間ごとに変わりテーマに沿って関連する単語や文化、言い回しを学習しました。食事、ライフスタイル、原住民、観光などについてです。先生が実際の体験談を語ってくださる事が多くあり、とても面白かったです。一番驚いたのは、休日の使い方の違いでした。パースの先生方は、休日に自然公園や海岸、または海外に行って屋外でゆったりとした時間を過ごす事が多いようです。私はそのような休日に過ごした方をした事はありませんでしたので、とても惹かれました。QOLをオーストラリアと日本で比較するとオーストラリアの方が高いです。その要因の一つに休日の過ごし方の違いがあるのではないかと思います。オーストラリアほど規模の大きな大自然は日本にはありませんが、繊細な日本ならではの場所は多くあります。休日はそこに出向き、心も体も休める習慣をつけようと思われました。授業の中で、英語を学びにきている多国籍な学生や日本語を学んでいるオーストラリア人と話す機会もありました。初めは会話が成り立たず、自分の英語力が不足に言葉が理解できないのかと思いましたがそれは違いました。外国人の多くは発音が間違っているにもかかわらず、自信満々に話します。だから、理解できない単語を初めから知らない単語だと思い込んでいたのです。何度も確認して聞いてみると、発音が違うだけでよく知っている言葉である事がよくありました。分からないことは素直に聞き、会話していくことで徐々に会話ができるようになりました。日本で過ごす中では絶対に関わる事がなかったであろう、コロンビア人やアルゼンチン人、南アフリカ人と話げたのも貴重な経験になりました。</p>	
<p>【研修後の抱負】 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>私の研究室には来年度、インドネシアからの留学生が来ます。彼は英語しか話す事ができないそうです。そこで、彼と研究室のメンバーや地域の人との間に私が入り、通訳できたらと考えています。正直、能力的にはまだまだ足りませんが、話分からない事を聞き直すことや、会話を深めることはできます。彼のサポートを通して、大学や地域に貢献していきたいと考えています。また、授業の中で鹿児島とオーストラリアの姉妹都市についてのホームページを英語で作成しました。実際にパースに在住している学生や先生に話を聞き、パースの人々に鹿児島のことを知ってもらう目的で作りました。パースと鹿児島をいろいろな項目で比較しているため、彼らにとっては理解しやすいと思います。このホームページを通して、鹿児島に興味を持ち訪れてもらえたらと考えています。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 中野 剛司

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>私の研修の参加目的は英語力の向上であった。しかし、5週間のオンライン上での研修を通し、単なる英語力だけではなく、海外の方の考え方や生活様式、文化など普段触れることができないことをCELTの先生方や他クラスの生徒との会話や授業を通して学ぶことができた。オンライン研修が始まった初日、先生が話す英語を聞き取ることで精一杯で、授業についていくことが困難であった。私は、英語を聞くにしても話すにしても、まず頭の中で日本語に訳してしまう癖があったので、英語のまま理解することや頭の中で日本語を考えずに英語を話すこと、先生が使ったフレーズを逐一メモを取り、会話の中で実際に使用するなどを心掛け授業に臨んだ。結果、授業についていくのはもちろん、質問に対して答えることや、自ら意見を述べることもできるようになった。また、研修内で行われた試験でもListeningは平均点を大きく上回る結果を得ることができた。しかし、SpeakingテストのFeedbackの際、まだ日本語を頭で考えて英語を話している時があると先生から指摘を頂いたので、今後も英語を勉強する際は指摘された点を注意していきたいと思った。授業を通してオーストラリアの歴史や文化、パースの観光スポットや動物、食べ物等日本と異なる多くのことを学ぶことができた。特に印象的なことは、週末の過ごし方である。月曜には週末にしたこと、金曜には週末に何を予定するのかを授業前に聞かれることが多かった。海外の方は、週末の時間を家族や友人と過ごす時間にあてたり、何かアクティブなことをすることが多く、それが当たり前だと知り、今までの自分の週末の過ごし方とは大きく異なり、今後の週末という時間をもっと大切に過ごすべきだと強く感じた。</p> <p>5週間のオンライン上での語学留学を終えた後、5日間のイングリッシュキャンプを行った。この研修では、鹿児島とパースの関係について、メンバー全員の研究内容とSDGsのつながりからテーマを決めWebを作成した。メンバーとのコミュニケーションは全て英語で行われた。この研修を通して、英語を使用して何かを成し遂げる力を習得することができ、英語を使用して物事を進めることの難しさや楽しさを実感することができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>研修後の抱負は、オンライン上での留学ではなく、実際に現地に行き留学をすることである。多文化の人々とのコミュニケーションや授業、英語の勉強や活用を通して、より海外に興味を持ち、現地での生活を通して海外の方の考え方や生活様式、文化などに直接触れ、グローバルな視点や柔軟な考え方を養いたいと強く感じたからである。留学を通して、グローバルな環境でも機能するコミュニケーション能力を備え、異文化の人々と協働して目標を達成できるような人物を目指したいと考える。</p> <p>今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、オンライン上での留学で得た経験や学びの成果を、留学、GOESに興味がある学生に対して伝え留学啓発を行い、後押しができるような取り組みを行う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 矢野 智大

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>私は、本研修で自身の物事に対する視野を大きく広げることができた。私は、これまで英語を学習するにあたって、積極的に他人とコミュニケーションをとる機会が少なく、英語で会話することは苦手であった。そこで本研修では、日常会話ができること、TOEICの点数向上を目標として取り組んだ。</p> <p>・オンライン研修について</p> <p>レッスンにおける英会話は、日常会話や文法、文章問題について話し合うことが多かった。日常会話では、一方的な質問では、話が続かないため、お互いに会話を広げられるように意識して話すように心掛けた。文法問題では、これまで学習してきたものと比較して、より実践的なものであり、定着に役立った。また、講師の方々には熱心に間違いを指摘して頂いた。</p> <p>私は本研修において、文法の正確性よりも上手く相手に伝えることを心掛けるようにした。オンライン形式であったため、研修先の講師の方々や、現地で研修を受けている様々な国籍の学生とコミュニケーションをとることができた。それにより英語に対する抵抗が減り、コミュニケーションを取るための自信に繋がった。しかし、出身国によって、英語のイントネーションが異なり、聞き取るのが難しいことが多々あった。そのため、自分の英語の発音を見直すきっかけになった。また、ネイティブな英語を聞き取るリスニング力の向上が必要だと感じた。平均で1日あたり約4時間のレッスンを5週間継続したことで、英語に耳を慣らすことができた。研修が終わる頃には、流暢ではないが、自分の思いや考えを伝えること、相手の話を広げることができるようになったと感じている。また、初めて会う海外の人とコミュニケーションを取ることの楽しさを知った。今回の研修は、国内に滞在したまま、ネイティブな方々と話すことができ、とてもいい機会であったため、来年度も実施される場合は周りの人にも参加を進めたいと思う。</p> <p>・イングリッシュキャンプについて</p> <p>また、研修後には学内において約2週間のイングリッシュキャンプが実施された。イングリッシュキャンプでは、オンライン研修に参加した鹿児島大学のメンバーと英語でコミュニケーションを取り、鹿児島とパースの関係性を説明するウェブサイトを作成した。そこでは、3つのチームに分かれて作業を進めた。私は、必要な写真やイラストの制作を担当した。他のチームと情報を共有し、効率的に作業を進めることができた。パース現地の写真など個人で準備できない写真は、研修でお世話になった講師の方々に協力をお願いするなど、研修でできた国際的な繋がりを活用することができた。また、実業務に近いことを実践できたため、今後、英語を使う際の自信に繋がると感じた。これらの研修を受けた結果、研修で得られた成果を確認するとともに、自分の英語能力を更に向上させることができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>私は、研修を終えて、オンライン上ではあったが実際に海外の学生や講師とレッスンや日常会話をともにすることで、自分の視野を広げることができた。それとともに、グローバル的視点の重要性を感じた。そこで、第一に個人の英語能力の更なる向上が課題であると考えている。英語能力の向上を図るために、TOEIC等の資格試験を積極的に受験するほか、英語の論文等を活用しようと考えている。また、現在自分が励んでいる研究で、国際学会等の英語の発表に挑戦できる機会があれば、参加したいと考えている。私は、将来、建設関係の企業に就職しようと考えている。就職した際は、グローバル事業への参加を希望し、広く活躍できる人材になりたいと考えている。それによって、海外の構造物を手掛け、維持管理をしたいと考えている。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・2年

氏名: 中村 康史

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>研修では、グローバルな能力として、感情の乗った英語を話す力を身につけ、それに伴い、英語でのコミュニケーション能力を向上させることができた。また、グローバルな視点として、世界各地の地域によって英語のアクセントが異なることに気づいたことから、日本語英語だからといって恥ずかしがらなくてもいいという考えを得ることができた。</p> <p>最初は、鹿児島大学の他のメンバーと同じクラスに配属され授業を受け入っていたが、もっと海外の人との会話の中で英語を学びたいと思い、クラスを変更してもらった。その後の授業では、中国人4人と香川大学の学生5人と一緒に授業を受けた。また、担当の先生はとてもテンションが高い方で、英語にしっかりと感情を乗せるよう何度も何度も指導された。自分の発する言葉に自然と感情を乗せることができるようになったおかげで、クラスの中国人との会話も弾み、仲良くなることができSNSで連絡を取り合うほどになった。この経験から、英語においても自分という人間を相手にしっかりと伝えることで関係性を生むことができることに気づいた。また、毎週金曜日には西オーストラリア大学の現地にいる留学生と交流する機会があった。現地の留学生はアルゼンチン、台湾、フランスと世界の様々な地域の学生がおり、毎回7、8人ほど集まってくれた。Zoomを通して全員と会話をしたが、地域によってアクセントに癖があり、なかなか聞き取りが難しいことが何度かあった。私自身、英語の独特のリズムをまだつかみきれていないところがあり、どうしても日本人独特のリズムで英語を話してしまうことに悩んでいた。しかし、グローバルな場ではいろいろなアクセントの英語が飛び交うことを実際に体感し、自分のスピーキングにもっと自信を持つていいと考えられるようになった。</p> <p>西オーストラリア大学での研修の後には、鹿児島大学で1週間のプログラムがあった。プログラムでは、英語でのWebページ作成及び、英語漫才の発表を行った。他のメンバーと協力して進めていくワークだったので、英語で協働するという貴重な経験をすることができた。時には上手く自分の考えを英語で伝えることができない場面もあったが、それで会話をあきらめるのではなく伝えようとする姿勢は英語学習をしていく上でとても大切だと感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>今回の経験を、同じ研究室のメンバーや家族などの自分の周りの人に共有する。特に後輩や兄弟などの若い人に、英語でのコミュニケーションの楽しさを共有することで英語学習に対する抵抗感を軽減したい。鹿児島に住んでいる若者が英語学習に積極的になれば今後自然と地域のグローバル化は進み、ひいては鹿児島にグローバル人材が増加することで地域産業の活性化にもつながると考える。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・2年

氏名: 宮原 佳美

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(GELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和 2年 8月 17日 ~ 令和 2年 9月 18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>本研修は、新型コロナウイルスの影響により1日4時間のオンライン授業を5週間受講することにより行われた。講義内容は文法や英単語の学習やリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの能力を培うものであり、毎週異なるテーマで先生や参加学生と議論を行った。さらにオーストラリアについて知ることも目的とされていた。5週間の研修の中で私はオーストラリアの歴史や文化、人々の生活について学ぶことができた。文化・歴史をテーマにした講義の中で動画やテキストを通してアボリジニがどのように生活してきたのか、何を大切にしているのか、またオーストラリアの人々が彼らや彼らの文化、つまり自国の歴史や文化をいかに大切にしているのかということを知ることができた。彼らの生活については週末の過ごし方や自然との向き合い方を知り、それによって人々の幸福度が高いということ、また日本人との違いや共通する部分を学ぶことが出来た。これを受けて異文化を学ぶことの喜びを知り、他国の文化についても知りたいと思うようになった。また講義において、自己紹介や各テーマについて議論をする中で自分自身を見つめなおす機会ともなった。本研修を通して私はこのように他者に興味を持ち、違いを受け入れそこから学びを得ることがグローバル化に必要なことではないかと考えた。また、オンラインでの西オーストラリア大学の先生や学生との活動の中で現地のことを知ることができ、英語の環境を味わうことが出来たことからオンラインの可能性についても考えることが出来た。</p> <p>さらに本研修では西オーストラリア大学での授業だけでなく本学で、本学の学生と共にウェブサイトを作成する5日間の活動も行った。このウェブサイトは「水」をテーマに日本とオーストラリア、鹿児島とパースを比較したパースの方々に向けた英語のウェブサイトとなっている。活動期間中は日本語を厳禁とし、テーマの設定から記事の執筆、イラストの作成や写真の撮影などすべて自前のウェブサイトを作成した。その他にも英語本の読書時間や英語の漫才やゲームを通して英語を学んだ。以上の5週間のオンライン海外研修と5日間の活動を通して英語がより身近なものになり、海外や学内での新たな友達とコミュニケーションをとることで自身の視野が広がった非常に有意義な時間となった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>前節でも述べたように、本研修で他者との違いを受け入れそこから学ぶことの可能性を学んだ。私は来春組織設計事務所で働くことが決まっており、そこでは新たに国際競争力を高める街づくりや地方都市の活性化を目指した街づくりに取り組んでいる。まさに本研修で学んだように他国やその地域を知り、違いを受け入れ、視野を広げて物事を考えることで人々に愛される建築、都市づくりをしていきたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・2年

氏名: 有馬 真輝

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>【研修を通じて学んだこと】 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>西オーストラリア大学附属語学学校の研修は全てオンラインで行われた。授業では英語の文法や様々な場面での表現、オーストラリアの歴史などについて学んだ。まず、ネガティブな意味で使用される単語や相手に失礼な表現を学ぶ授業があった。これまで日本ではネイティブスピーカーによる単語のニュアンスを知る機会はなかったため、より実践的な英語を知ることができた。なお、オーストラリアは多文化社会であり、異文化に対する理解が非常に高い。特にクラスの先生が理解できなくても受け入れると仰っていたことは印象的であった。また先生の色々な国の料理や食材に触れ、多文化を楽しんでいる姿勢は魅力的で見習いたいと感じた。日本ではあまり異文化に触れる機会は少ないが、多種多様な考え方に対し、柔軟な思考で対応していきたい。具体的には、バックボーンが異なる人と出会っても自分の物差しで判断するのではなく、その人自身をみるということだ。</p> <p>またクラスは日本人の学生が多かったが、授業時間外の別クラスに参加し多国籍の生徒とアボリジニーについて学んだり、ゲームをしたりした。英語を母国語としていない国の学生のため意思疎通が難しいこともあったが、ジェスチャーや簡単な英単語を使って会話し相手のことが理解できたときはとても嬉しく感じた。これまで人前で間違ふことは恥ずかしいと考えていたが、それよりも何事にも挑戦することの方が何倍も価値があると気づいた。</p> <p>最後にイングリッシュキャンプは5日間という短い期間で鹿児島市とパースについての紹介ホームページを作成するものであった。題目決めから調査、英文作成など内容がとても濃いものであった。一番苦労したのは、担当テーマの調査内容が他のテーマの調査内容と被ってしまったことだ。もし日本語ならスムーズにその担当者と方向転換することができただろう。しかし英語のみでの会話のため、相手に理解してもらえるような簡単な英単語やここでも非言語を用いて物事の本質を伝えることの重要性を感じた。また英語の添削ではネイティブの指導員から多くのことを指摘され、心が折れそうになることもあった。これも考え方の違いを目の当たりにした出来事であり、相手の文化だと割り切る必要があると感じた。最終的にこのキャンプでは納得のいくホームページを作り上げることができ、それは私にとって大きな自信になった。また自己の能力を把握し、できることとできないことを見極め、計画的に物事を進めていく力も身に付いたように思う。</p>	
<p>【研修後の抱負】 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>この研修で培った英語力を継続、向上できるように今後も英語の勉強を続けていく。また以前、外国の観光客がお店で困っている際に上手く返答できなかったことがとても心残りである。世界の感染症問題が落ち着き、再び訪日外国人が戻ってきたとき、スムーズに観光ができるようなお手伝いをしたい。また、外国企業との仕事に積極的に参加し、他文化理解のあるビジネスマンになれるようビジネス英会話も習得できたらと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・2年

氏名: 佐藤 由奈

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>本研修を通じて得られた一番大きな成果は、「相手を尊重し、自分を表現する」大切さを改めて実感したことである。</p> <p>研修に参加するまでは、この重要性を認識はしていたものの特別問題にはしていなかったが、国籍や文化、価値観など様々な違いを超えたコミュニケーションで得た新たな視点や経験は、自分のこれまでの価値観を覆すほど意義深いものであった。</p> <p>まず初めに私は、自分の意見を伝える難しさに直面した。元々、英語能力に対する自信がなく、相手に理解してもらえないのではないかと不安を感じていた。研修では、発言しようと思っても言葉が出ずにもどかしさを感じる場面も多々あったが、先生の‘Don’t be shy!’に励まされながら、ジェスチャーや表情を駆使して前向きに取り組んだ。その結果、自分の中で大きな進歩を実感することができ、以前よりも英語学習に対する向上心が高まり、さらにグローバルな視野を広げていきたいと強く感じた。また、今回の研修はオンライン形式ではあったが、週に1度、現地の西オーストラリア大学で学ぶ海外の学生と交流する機会があった。その際に多くの学生が、自由に堂々と自身を表現しており、その姿が強く印象に残った。なぜ、初対面にも関わらず、これほど心を開いてくれるのだろうか初めは驚いたが、相手の‘違い’を恐れずに、尊重するからこそ、自分に対しても自信を持つことができ、より良い関係を築くことができるのではないかと考えた。実際に、その学生たちが心を開いて自分を表現し、私の話に耳を傾けてくれたおかげで、失敗を恐れず積極的にコミュニケーションを図ることができ、互いに充実した時間を過ごすことができた。社会に貢献する上で必ず必要となる「協働」は、時に価値観の不一致を伴うが、国境を超えたコミュニケーションが必要となる状況では、そのギャップはさらに大きくなるのではないだろうか。</p> <p>だからこそ、相手を受け入れることのできる柔軟性や、自分を表現する能力を得ることは、限られた時間で成功を収めることに繋がると考える。</p> <p>今や都心に限らず、鹿児島を含む地方もグローバル化が進んでおり、積極的に世界に目を向けていく必要があると見受けられる。それゆえに、上記で述べた「相手を尊重し、自分を表現すること」はとても些細なことかもしれないが、さらにグローバル化する社会の中で、国境を超えて様々なバックグラウンドを持つ人々と、何か物事を成し遂げるためには不可欠だと考える。さらに、これらを実現させるための1つの手段となる英語の重要性を再認識することができ、今回の研修は何にも代えがたい経験となった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>日本は他国に比べて、自分の意見を述べたり、自分を自由に表現したりする環境が少ないように感じる。本研修で、学生同士だけでなく先生と生徒が対等にコミュニケーションを取ったように、この先私がどのような立場であっても、相手の意見を受け入れ尊重し、自分の意見をしっかりと伝える姿勢を持ち続けたい。また、社会に出た際には、様々な人とより良い関係を築きながら、多くの人々に感動を与える空間の実現に尽力していきたいと考える。そして、共に創造した空間を通して、地域のグローバル化や活性化に寄与することが私の目標である。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 河野 光

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>私はこの研修を通して様々なことを学ぶことができました。オーストラリアと日本では多くのことが異なり、特に人種の違いに対する価値観が私にとって新鮮なものでした。オーストラリアは白人、黒人、そして先住民であるアボリジニーといった多種多様な人種や民族が生活しています。日本では、日本人以外ほとんど暮らしていないため外国人に対して壁を作る傾向がありますが、オーストラリアで暮らす人々はそういった感情はなく、それが当たり前だという認識を持っていることを聞き驚きました。</p> <p>講義の内容で先住民のアボリジニーの歴史が最も興味深いと感じました。彼らは今では普通に街を歩いているようですが少し前までは迫害の対象にされており悲惨な歴史を持っています。彼らが普通に生活できるようになるまでの経緯を聞き、なぜオーストラリアが多文化社会として成り立っているのかを知ることができました。相手の文化や考えを尊重し受け入れることが最も重要なことだと感じました。</p> <p>また、オーストラリア人だけでなく他の国の生徒と話す機会があり、そこで私は一つ大きな違いを感じました。それは発音の違いです。私が話した学生はコロンビアやアルゼンチン等、南米の国出身の方が多くいました。これまでほとんどネイティブの英語しか触れる機会がなかったため、簡単な単語や文でさえ聞き取るのに苦労しました。同様に私たち日本人が話す英語もノンネイティブの方には正確に伝わっていないように感じたため、発音をしっかりと学ぶことが重要だと感じました。</p> <p>英語力に関していえば、研修に参加する以前に比べリスニング能力とスピーキング能力が上がったと思います。私は二つのことを心がけ授業に取り組みました。一つ目は先生が話していることをそのまま繰り返し話す、つまりシャドーイングをすることです。通常の対面授業の場合は他の学生の迷惑になりますが、オンライン授業ではマイクをミュートにすることができるためやりやすく感じました。二つ目は積極的に話してみることです。英語でうまく表現できなくてもネイティブの方たちはおおよその意味を汲み取ってくれるため、間違っても積極的に英語を使うことを心がけました。</p> <p>コロナウイルスの影響で予定していた留学がなくなり非常に残念な気持ちでしたが、この研修のおかげで有意義な5週間を過ごすことができました。インターネットだけでは得ることができない、様々な国の方たちの考えを得ることができ、物事を多角的に捉えられるようになりました。さらに英語力を向上させるためにこれからも継続して英語学習をしていこうと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>地域のグローバル化を活性化させるためにはまず、海外のことを知ってもらうことが重要です。オンライン授業終了後、参加した学生と協力してオーストラリアに関する情報を調べWebページを作成しました。私は授業を通して身近にある些細なことでもオーストラリアと日本では相違点があると感じ、それをより多くの人に知ってもらうためのWebページができあがりました。現在、コロナウイルスの影響で訪日外国人観光客がいませんが、これが収まったら鹿児島の観光案内を行うアルバイトなどをやってみたいと考えています。そのためにも今後、より英語力を向上させるために学内で開催されている英語のイベントなどに参加する予定です。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・1年

氏名: 我謝 瑞希

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修
研修先(大学・国・都市名)	遠隔研修: 西オーストラリア大学、同大学大学英語教育センター(CELT)による遠隔講義プログラム
研修期間	令和2年8月17日 ~ 令和2年9月18日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕 * 研修を通じて、グローバルな視点や能力をどのように得ることができたか。</p> <p>研修を通して、英語でのコミュニケーションに加えオーストラリアをはじめとする他国の文化についても知ることが出来た。毎週の講義毎に、文化、場所、パーソナリティーについてディスカッションの題目が与えられこれらの事について、オーストラリアや他国と日本との比較をする授業があった。この機会がよりグローバルな視点で物事を見ることに繋がったと感じた。特に他国の幸福度と住居環境などについて調べ、日本と比較した事を発表する取り組みにおいて日本、他国の状況についてよりグローバル視点で理解を深めることができた機会であった。また、CELTでのオンラインクラスで他国の学生とコミュニケーションを取る授業では発音やイントネーションの違いに触れることができた。普段は英語での授業で、日本人同士のみでの会話であったため他国特有の発音の違いなどについて感じとれる機会が無かった。そのため今回実際に会話をしたことで同じ単語や質問でもお互いの母国語のイントネーションが円滑な英会話を試みる上で影響を与えることを知ることができた。5週間の語学研修を通して、普段は学ぶことのできない発音の仕方について練習できたことにより以前よりも他国の学生とともにコミュニケーションを取ることが容易になった。語学研修の後行われたホームページ作成では、姉妹都市であるパースと鹿児島の水を取り巻く環境についての違いを比較し作成に取り組んだ。気候の違いによりインフラ整備や災害対策の違いがあることを知った。特にパースでは干ばつが問題になっており雨量の違いにより国民の水に対する意識の違いについて比較することでかなりギャップを感じた。このホームページ作成を通して国際的な課題となっている持続可能な社会に関連する水不足の問題についても他国と比較することでグローバルな視点で解決策を考えることが出来た。今回の研修を通しての総括として、英語でのディスカッションを通して英会話のみならず他国の状況や違いに対してグローバル視点で自分自身や他の生徒の意見を考察できる良い機会となったと考えている。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕 * 今後、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、どのような取り組みをするかについても記載すること。</p> <p>地域の活性化やグローバル化に貢献するためにまずは今回の研修でディスカッションをした持続可能な社会について考察する機会を作りたいと考えている。私自身の専攻分野である食品に関することについて、他国の留学生とともに話し合い他国の視点も取り入れた解決策を地域に還元していきたい。更に今後鹿児島県の食品企業が市場を世界に展開する際に重要とされている食品の安全に関する規格取得のサポートを行うことで地域に貢献したいと考えている。</p>	